

地域学習におけるネイチャーゲームの導入的活用 ～社会教育活動「ほんべつ学」を事例に～

2024年07月09日
永末透威(北海道本別町)

1.はじめに

近年、学校教育において総合的な学習(探求)の時間に力を入れる教育機関が増加傾向にある。文部科学省によると、総合的な学習(探求)の時間は「変化の激しい社会に対応して、探求的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標にしていることから、これからの時代においてますます重要な役割を果たすもの」である(以下、総合的な学習(探求)の時間を「探求学習」と記す)。探求学習は一般的に「課題設定→情報収集→整理・分析→成果発表」という学習フローで進められ、一連の活動を通して多角的視野や論理的思考力などを養うことが可能である。

筆者が暮らす北海道本別町の小中学校および高等学校においても、地域と連携した探求学習が行われており、子どもたちの資質・能力の向上が期待されている。これに先駆けて平成26年度から本別町教育委員会では、地域をもっと知り、町の魅力を再発見する地域学習として『ほんべつ学びの日「四つの風」総合事業 ふるさと学習「ほんべつ学」』を年に数回、開催している。対象は町内在住の一般や子どもなど、事業内容に応じて様々である。この度、町教育委員会 社会教育担当から「ネイチャーゲームを活用して、ほんべつ学夏のまなびを開催したい」との講師依頼を受け、小学生を対象として開催する運びとなった。

そこで、今後の学校教育における探求学習の実施を見据えた導入的な位置付けで、様々な事象を多角的な視点で捉える観察力と情報収集能力を養うことを目的に事業内容を組み立てた。本稿は、2024年7月7日に開催した、ほんべつ学夏のまなび「ネイチャーゲーム～草地の自然とふれあおう!～」における実践事例である。

2.当日の実践内容

事業は10時から約1時間半で本別町中央公民館および本別川河川敷をフィールドに開催した。町内在住の小学生8名および保護者5名が参加された。当初、終日野外での活動を予定していたが、小雨が降っていたため、前半の40分程度は屋内で実施、その後天候が回復したため、野外での活動に移行した。

屋内では、<ノーズ>と<動物交差点>を実践した。<ノーズ>ではウシ(家畜だが、放牧環境は広義に草地。)とパンダ(国内に生息しない種だが、高原を生息環境とする絶滅危惧種として採用。)を取り上げ、子どもたちを本事業へ惹きつけた。その後、保護者も含めて参加者の背中に



写真1 ほんべつ学夏のまなび「ネイチャーゲーム～草地の自然とふれあおう!～」の告知用ポスター

動物カードを付けて〈動物交差点〉を2回実践し、自分がどの生き物になったのか、様々な視点でヒントを集め、正解を導き出した(情報収集→整理・分析→成果発表)。

途中小雨が上がり、後半は本別川河川敷(公民館裏)に移動し、野外で〈森の色あわせ〉と〈フィールドパターン〉を実践した。〈森の色あわせ〉では、「Nature Game 森の色あわせ～自然の中にある和の伝統色をさがそう～夏」を使用し、河川敷の草地の中から様々な色を探した。〈森の色あわせ〉で色彩に着目した後、〈フィールドパターン〉を実践し、自然界にある様々な形状に焦点を当てた。実践時は「フィールドパターンカード」と筆記具を配布した他、観察アイテムとして「虫眼鏡」を貸し出し、肉眼と虫眼鏡を使って拡大した見方の両方で様々な形状を探した。公民館に戻り、活動の振り返りをした後、事業を終了した。

3. アクティビティ実践時における参加者の様子

実践したアクティビティ毎に参加者の様子を記す。はじめに屋内で実践した2つについてである。〈ノーズ〉では、ヒントをもとに時折、頭を傾げながら悩む様子が見られた。「あれかな?」「いや、何か違うな。」などと想像を膨らませている発言が聞こえた。〈動物交差点〉では、〈ノーズ〉実践時にヒントとして提供した足の数、個体サイズ、体色、食べ物、生息環境などを模倣した内容を他者に聞く様子が見られた他、飛翔性の有無、動物園で見られるか、触れた場合の感覚などのオリジナルな内容を質問し、情報収集する様子が印象的であった。1回目は比較的馴染みのある動物を取り上げ、2回目は昆虫類を含め少し難易度をあげてみたが、1回目の質問を踏まえて、多角的な視点で情報収集していた。保護者にも参加してもらったことで、子ども同士だけでなく、親子でこれまでの自然体験を振り返りながら情報共有していた。

次に野外で実践した2つについて記す。〈森の色あわせ〉では、河川敷で見られる様々な自然物の横にカードを並べて(あるいはカードの色の上に自然物を乗せて)、色を探す様子が見られた。草花や土壌だけでなく、フィールド内の石に着目して探す参加者も見られ、多角的で柔軟な発想に驚いた。〈フィールドパターン〉では、花卉の形を上から覗き込んで星形に気がついたり、葉脈を観察して平行を発見したりと観察力の向上が見られた。虫眼鏡を使ったことで〈ミクrohayk〉とのコラボレーションのような活動になり、レンズ越しの拡大された世界を子ども同士あるいは親子で共有する様子も見られ、他者と共感する力が育まれていた。個人的には、アリの巣をを真剣に虫眼鏡で観察している子どもの姿が印象的だった。



写真 2.3 屋内における〈ノーズ〉実践時の活動写真



写真 4.5 屋内における〈動物交差点〉実践時の活動写真



写真 6.7 野外における〈森の色あわせ〉実践時の活動写真

4. 考慮すべき課題

先述の通り本事業は、当初、終日野外での活動を予定していた。しかし、開催時間直前に小雨が降り始めたため、急遽予定を前半：屋内活動、後半：野外活動に変更した。雨天時の対応を視野に入れ、事前準備を行う必要がある。幸い、今回は事前に気象予報を確認しており、動物カードと洗濯バサミを予備として準備していたため、急な予定変更に対応が可能となった。その一方で、野外活動に移行した際、実践内容の変更を余儀なくされた。〈目かくしイモ虫〉で草地の環境を五感で感じた後、〈森の色あわせ〉〈フィールドパターン〉を実践し、最後に探求活動の第1段階である課題設定として、草地の自然の中から「なぜ？ どうして？」を考える活動を予定していた。時間の都合上、〈森の色あわせ〉と〈フィールドパターン〉にアクティビティを絞り、残り2つは割愛した。時間配分に慣れないうちは、晴天時・雨天時・晴天→雨天時・雨天→晴天時などの複数の場合を想定した計画を練ると良いだろう。

また、参加時の服装を「屋外での活動に適した服装」として周知していたが、この時期は外気温が高く、半袖半ズボンの参加者が多かった。ウルシ類やアザミ類などによる身体への影響を防ぐためにも、参加時における服装の周知は「長ズボン推奨」のように、活動内容に適した服装を

具体的に提示する必要があるだろう。



写真 8.9 野外における<フィールドパターン>実践時の活動写真

5.本報告を参考にされる方へ

本稿で紹介した実践事例は、ネイチャーゲームを地域の社会教育活動の場で活用した事例です。現状、国内には様々な社会教育施設が存在しています。身近なところで挙げるとすれば、図書館や博物館、公民館など。家庭や学校外ですべての世代の方に提供される生涯学習のための施設です。各施設毎、年間を通して実に多彩な事業が企画・開催されていますが、内容の恒常化や参加者数の減少といった課題を抱えている地域・施設も少なくありません。今回の事例は、担当者自身、実際にネイチャーゲームを数度体験した経験があり、ぜひやってほしいという想いから開催に至りました。意外なところに需要が転がっていますので、身近な社会教育施設にアプローチしてみたり、参加者とのつながりをより一層大事にしてみてもはいかがでしょうか。

また、今回は学校教育における探求学習の導入的な位置付けで実践を試みました。気象状況の影響で急遽予定を変更したので、提供内容としては正直なところ不完全燃焼です。しかし、今回の実践が物事を多角的に捉える観察力や様々な視点で「なぜ? どうして?」と感じる探究心を高めるきっかけになれば幸いです。参加した小学生の子どもたちの学校での学びに深みが増すことを願っています。